

令和6・7年度

三重県生徒の英語力向上推進事業

I C Tを活用した
児童生徒の英語力向上に係る取組
～英語力向上のためのI C T活用の効果検証（小学校）～
研究実践事例集



三重県教育委員会
研修推進課

はじめに

近年、急速に進展する情報化社会においては、児童が多様な情報を適切に活用しながら学びを深めていく力の育成が一層重要となっています。学校教育においても、I C Tを効果的に活用し、主体的・対話的で深い学びの実現を図ることが求められています。

学習指導要領では、指導計画の作成と内容の取扱いにおいて、「児童が身に付けるべき資質・能力や児童の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、児童の興味・関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること」と示されており、I C Tの活用をととして情報活用能力を育成し、学びの質の向上を図ることの重要性が示されています。

この趣旨をふまえたI C T活用の取組として、例えば、児童が外国語を話す場面を録音・録画し、その映像をもとに児童同士でやり取りを行ったり、改善点を共有したりする学習活動が考えられます。さらに、これらの記録は、学習評価や児童へのフィードバックをはじめとする多様な場面において活用することができます。

県教育委員会では、「三重県生徒の英語力向上推進事業」の一環として、令和6年度は三重大学教育学部附属小学校、令和7年度は志摩市立志摩小学校を研究推進校とし、英語授業でのI C T活用（録音・録画）が児童の英語力や情意面にどのような効果をもたらすかについて研究を実施しました。本研究では、具体的な授業実践とともに、パフォーマンステストやアンケート結果などの教育データを詳細に分析することで、その有効性を客観的に検証しました。

本冊子では、2年間の研究におけるデータ分析結果とともに、実践校における研究実践事例を掲載しています。

本実践事例集が、日々の授業や地域の研修等において活用され、I C T活用が目的化することなく、児童が目的意識を持って英語で伝え合う力の育成に資する有効な手段として定着し、言語活動のさらなる充実につながることを期待します。

令和8年3月
三重県教育委員会

<目次>

はじめに

- 1 ICTを活用した児童生徒の英語力向上に係る取組
～英語力向上のためのICT活用の効果検証（小学校）について～・・・1
三重大学 教授 金子 淳
（「英語力向上のためのICT活用の効果検証（小学校）」指導助言・分析協力者）
- 2 効果検証に向けた研究実践事例
～令和6年度及び令和7年度 英語力向上のためのICT活用の効果検証～
 - （1）令和6年度 三重大学教育学部附属小学校 研究実践事例・・・9
 - （2）令和7年度 志摩市立志摩小学校 研究実践事例・・・19

ICTを活用した児童生徒の英語力向上に係る取組 ～英語力向上のためのICT活用の効果検証(小学校)について～

三重大学 教育学部 英語教育講座 教授 金子 淳

1. 概要

三重県教育委員会が受託した、文部科学省「生徒の英語力向上推進事業」において、ICT特にタブレット端末を用いた録音・録画の活動が、児童の英語力と情意面にどのような影響を与えるかについて、2年間にわたり取り組み、効果を検証しました。結論として、学力・情意の両面において効果がある(統計的に有意である)ことが確認されました。そして、特に、ふだん人前で喋るのが苦手で発表をあまりしない児童に効果的であることや、英語を勉強したいと思っている児童はタブレットやデジタル教科書への関心が強くなったことも明らかになりました。(発表や話すことにおけるやり取りにICTを使う際、じゃっかんではありますが、英語力も向上することがわかっています(弱い正の相関)。それゆえ、タブレットやデジタル教科書への関心が高まることにより、発表や話すことにおけるやり取りにICTを使う機会が増え、その結果、英語力が向上する可能性が期待されます。)

2. 取組の背景・課題

三重県の小学校における、令和5年度までの英語教育の取組状況は「令和6年度 三重県 英語教育改善プラン」に詳細に記されています。それによると、改善が進んだ点として以下の3点が挙げられています。①「授業における、児童の英語による言語活動の時間の割合」が増加した(R4: 91.3%⇒R5: 95.9%)、②「英語の授業におけるICT機器の活用状況(発表ややり取りをする活動)」が改善した(R4: 85.1%⇒R5: 87.9%)、③「英語教育に関する小中連携の実施状況」が改善した(R4: 68.2%⇒R5: 83.1%)。

しかし、その反面、未だ改善が必要な点も指摘されています。そのうちのひとつとして、「英語の授業におけるICT機器の活用状況(発話や発音を録音・録画)」が前年度から減少したとされています(R4: 67.8%⇒R5: 63.2%)。なぜ、英語の授業においてICTを使うことが大事かと言うと、文部科学省の令和6年度「英語教育実施状況調査」(概要)にもあるように、発表や話すことにおけるやり取りにICTを使えばじゃっかんではありますが、英語力も向上することがわかっているからです(弱い正の相関)。つまり、ICT(タブレットやデジタル教科書)を活用することは、英語力向上の観点からすれば、一定の意味があるのです。

減少した要因として、さまざまなことが考えられますが、特に挙げるとするなら、学習者用デジタル教科書等、児童の英語力向上につながる効果的なICTの活用場面や方法が明確化できていなかったことや、具体的事例の発信も少なかったことが考えられました。この状況を改善するため、三重県教育委員会は、言語活動を充実させ児童の英語での発信力向上を図る目的のもと、英語の授業における児童1人1台端末等の活用の推進に力を注ぐことにしました。言い換えれば、先生方みなさまに向けて、活用場面や方法を明確にして、具体的事例を広く発信することに取り組むことにしたのです。

具体的には、2年計画の取組を立案しました。1年目(令和6年度)は研究推進校を指定し、そこで実際にICT活用(児童生徒による、発話や発音などの録音・録画)を行ってその効果検証を行います。そして、実践公開を行なって、その成果を県内に共有・普及させることとしました。さらに、2年目(令和7年度)は1年目の成果を踏まえ、1年目と異なる新たな研究推進校で効果を検証、研修会を実施、言語活動を充実させ、児童の英語での発信力向上を図ることを目的とする、ICT活用をした授業づくりを広く県内外に発信していくことにしました。

効果があったかどうかを科学的に検証する場合、一般的に、比較対照実験というものを行います。A クラスと B クラスがあった場合、A クラスには新しい指導法を行い、B クラスにはこれまでの指導法を行って、違いが出るかどうか検証する、というものです。ただ、公立の小学校でその検証を行うのはいろいろな状況から、少し難しいように思われます。そこで、1 年目の研究推進校として、三重大大学教育学部附属小学校に協力をお願いすることにしました。文部科学省は、国立大学の教育学部附属小学校は、実験的・先導的な教育課題に取組み、地域における指導的・モデル的な学校としての役割・使命があります、としていて、このような実験的な取組を行える環境にある、と言えるからです。

なお、この検証を行うために、附属小学校の児童と保護者から今回の取組に参加することについて、任意で同意書を提出していただきました。任意ですから、もちろん、参加しないことを選ぶこともできますし、参加しなかったからと言って成績に影響するようなことは一切ありません。附属小学校は 3 クラスありますが、実際のクラス名は明らかにせず、便宜上、x 組、y 組、z 組とさせていただきました。このうち x 組に 2 学期に録音・録画の活動を行いました。y 組と z 組はこれまで通りの授業です。それで 2 学期末に違いが出たかどうかを見ることにしました。念のため、付け加えさせていただくと、3 学期は逆のことをしました。つまり、x 組はこれまで通りの授業を行い、y 組と z 組に録音・録画の活動を行うようにしたのです。これですべてのクラスが録音・録画の活動に取り組み、みんな公平かつ平等になるようにさせていただきました。

2 年目は、公立小学校で実践することにしました。ただ、すでに述べたように公立の小学校で比較対照実験を実施することは難しいので、まったく同じ方法で検証することはできません。それゆえ、2 年目は比較対照実験はせず、どのような傾向を持つ子どもたちに特に効果があったか、そして情意面に変化があったかについて、検証を行うこととしました。さまざまな状況を慎重に考慮した上で、2 年目の研究推進校は、志摩市立志摩小学校さんにお願いし、お力添えをいただけることになりました。

3. 1 年目(三重大大学教育学部附属小学校)の取組とその成果

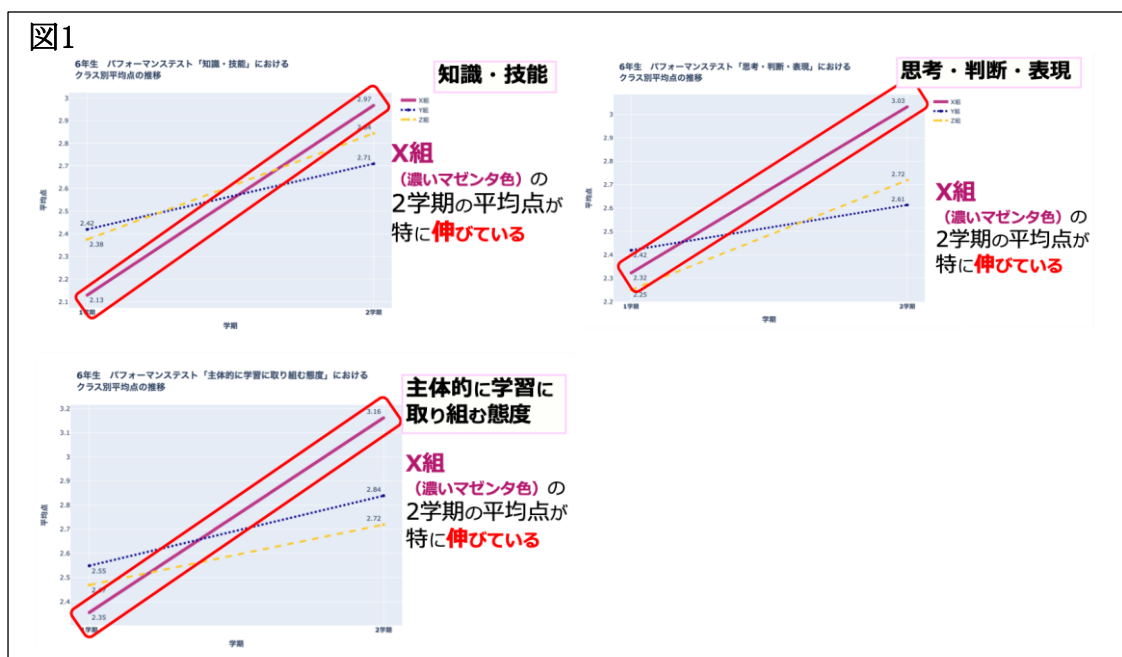
附属小学校での取組は井上大先生が詳細に実践内容を書いてくださっていらっしゃるの、ここではその取組の効果検証に焦点を絞って書かせていただきます。対象は 6 年生の児童です。期間は令和 6 年 2 学期(9 月から 12 月)です。録音・録画の活動を実施したことによって、英語力が伸びたかどうかを見るわけですから、パフォーマンステストの成績を見ることにしました。パフォーマンステストの成績の変化を見るために、録音・録画の活動の実施前と実施後にそれぞれ 1 回ずつ行いました。また、英語力とは別に、英語を勉強したいという、やる気が英語力の向上に結びつくことがありますので、英語を勉強したいという気持ちに変化が生じたかどうかを見ることにしました(情意面)。こちらについても 2 学期始めと 2 学期末に英語に関するアンケート調査を行い、測定しました。それから、録音・録画の活動を行ったことについて、どのように感じたかを確認することも大事です。それゆえ録音・録画の活動を行ったクラスだけ、この活動についてどう思ったかを尋ねる「録音・録画の活動についてのアンケート」を実施しました。したがって、収集したのは以下の 5 つのデータになります。

- ・1 学期末と 2 学期末に実施したパフォーマンステスト
- ・2 学期始めと 2 学期末に実施した英語に関するアンケート調査
- ・録音・録画の活動についてのアンケート

上記のデータは一般的にはそれぞれ個別のものとして扱われますが、ここでは AI 技術を使って教育データサイエンスの観点から分析を行いました。このような分析をすることによって、ただ点数やアンケートを見ていただいただけでは見えてこないものが、はっきりと見えてくるからです。

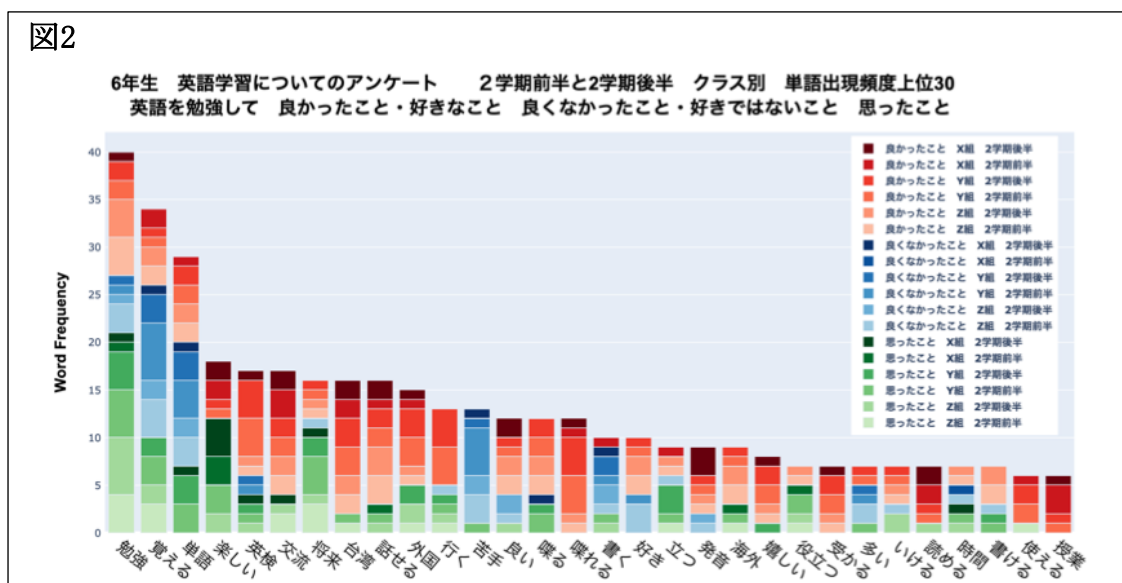
① 英語力における検証

1学期のパフォーマンステストの結果と2学期のパフォーマンステストの結果を比較したところ、全体的に平均点は上がっていました（図1）（もちろん1学期のパフォーマンステストと2学期のパフォーマンステストは問題が違いますから、当然ながら難易度が違うことも考慮に入れておく必要があります）。



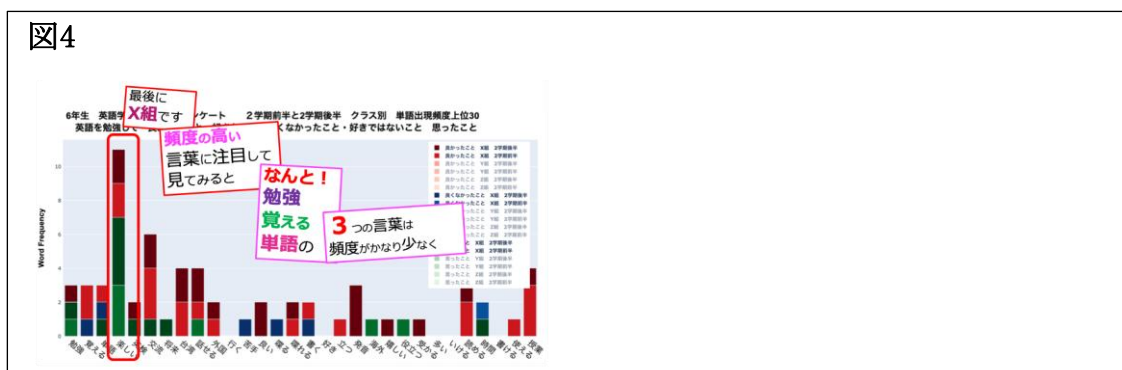
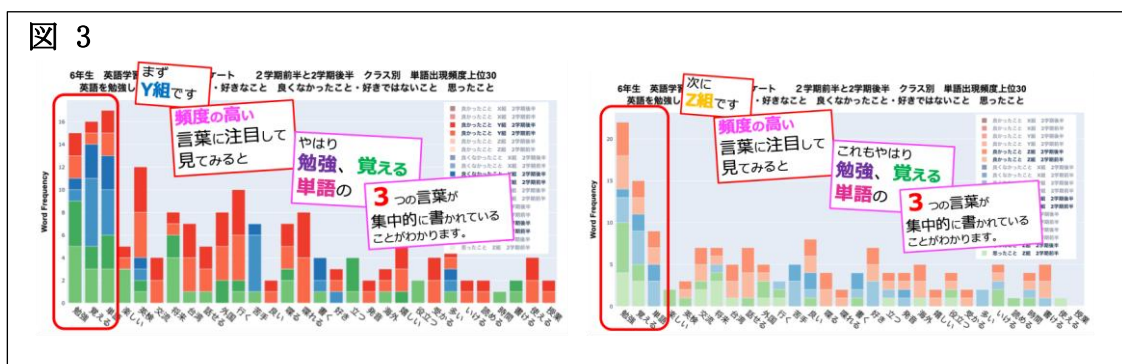
特に、録音・録画の活動を行ったx組の伸びが際立っていますね。ただ、この結果は偶然、良かっただけで、もう一回行ったら違う結果になった、ということも起こり得るかもしれません。だから、偶然の結果ではないということを明らかにするために、統計的仮説検定を行いました。その結果、知識・技能について、x組とy組の間に有意差がありました。主体的に学習に取り組む態度については、x組は他の組すべてと有意差がありました。有意差があるということは、x組がダントツで成績が伸びているのは偶然ではありませんよ、すなわち効果がありましたよ、という意味になります。

② 情意面における検証



次に情意面を見ていきましょう。「英語学習についてのアンケート」を、録音録画の活動に取り組む前（2学期始め）と録音録画の活動に取り組んだ後（2学期末）で実施しました。そのなかで、「英語を勉強して良かったこと・好きなこと（赤色系）」「良くなかったこと・好きではないこと（青色系）」「思ったこと（緑色系）」の自由記述で書かれている言葉の数を数えて、多いものから順番に並べました。さらにクラス毎に積み上げて一目でわかるようにグラフにしました（図2）。

パッと見て気づくのは、赤色系の色がやや多いような感じがしますので、基本的には英語を勉強して良かったという文脈で自由記述の文章を書き込んでいることがわかります。また「勉強」「覚える」「単語」の3つの言葉が集中的に書かれていることもわかります。どうやら多くの児童は、英語は「勉強」であり「単語」を「覚える」ものだと思っている傾向が見られますね（少し残念な感じがしますがそれでも）。この傾向はすべてのクラスで同じなのでしょうか。クラス毎に違いがあるか、分けてみましょう（図3と図4）。



驚いたことに、これまで通りの授業をしていたy組とz組は同じような傾向が見られましたが、録音・録画の活動をしたx組は他のクラスと違って、「勉強」「覚える」「単語」が少なく、「楽しい」という言葉が最も多く書かれていることがわかりました。

そこで、もう少し詳しく調べるために、録音・録画の活動をしたx組だけ、「録音・録画の活動についてのアンケート」を実施し、「タブレットを使った録音・録画の活動をしたことで英語の力がついたと思いますか」を尋ねてみました。一般的にアンケートの自由記述は、分析する人がなんとなく気になった文章をその人の感じ方で選び出すことが多いのですが、それではその人の主観で選んだことになり、客観的ではありません。ここではそれを避けるため、プログラムを書いて、AIに選ばせました。その結果（図5）、AIが選んだ児童は「とても英語の力がついた」と思っていて、その理由として「発表をあまりしない自分が喋ることによって英語の力がついたから」でした。ちなみにこの児童のパフォーマンステストの成績は、1学期末は知識・技能 B、思考・判断・表現 B、主体的に学習に取り組む態度 B でしたが、2学期末は AAA に伸びていました（S・A・B・Cの4段階評価）。

図5



とてもそう思うという理由として
児童が答えた文章の中から

この質問に
もっとも合っている
回答文として
AIが選んだのは

おそらくこの児童にとって、全体で進めていく指導法や学習法は個性や学習の傾向に由来する理由によって、あまり得意ではなかったのかもしれませんが。それが録音・録画の活動を導入することによって、個性や学習傾向がばっちり、この児童には合っていた、ということだったと考えられます。他の人の前では緊張するということもあるでしょうし、話すことが恥ずかしくて苦手だ、ということもあるでしょう。また、1人で練習しますから「失敗してもいいや」という安心感もあるので、英語を話す回数も自然に増えます。それが情意面の向上に表れ、英語力と結びついたものと思われる。まさに個別最適な学びが実現した瞬間ですね。

思えば、すべての児童にぴったり合う指導法というものは存在しません。それぞれの個性や学習傾向に応じて、ぴったりの指導法・学習方法は変わってくるものだと思います。ただ、これまでは一人一人の児童に応じた学びを進めていくことは不可能でした。それが科学技術の進歩により、ICTが登場し、それが可能になったのです。そうだとするなら、今の時代、ICTを活用しない、というのはもったいないことです。ぜひ活用していきましょう。

以上から、タブレット端末を用いた録音・録画によるICT活用は、学力・情意の両面において統計的に効果があることが確認され、全体的に効果があったものの、特に、ふだん人前で喋るのが苦手で発表をあまりしない児童に効果的だったことも明らかになりました。

4. 2 年目(志摩市立志摩小学校)の取組とその成果

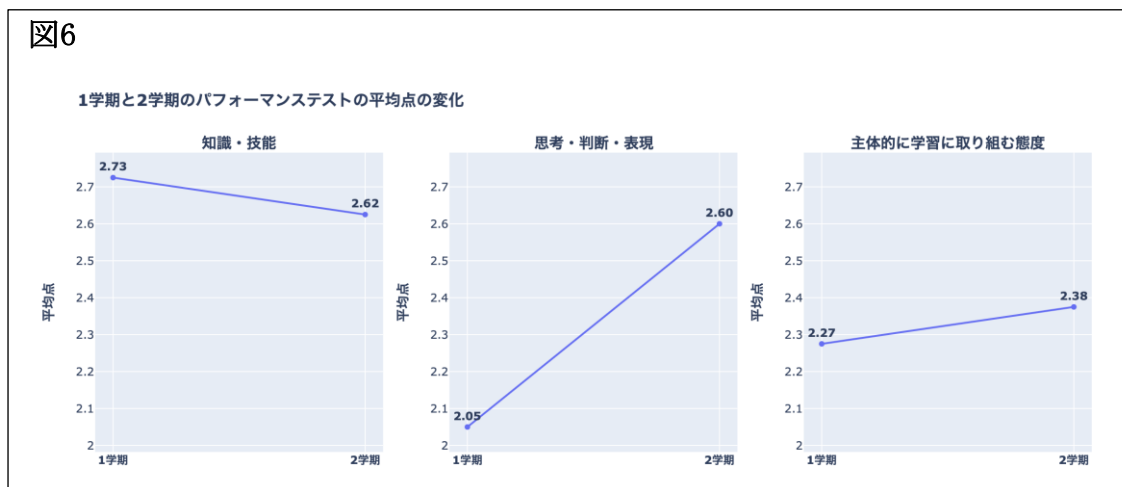
2年目は志摩市教育委員会のお力添えのもと、志摩市立志摩小学校で実践しました。志摩小学校での取組は樋田愛先生が詳細に実践内容を書いてくださっていらっしゃるの、ここでもその取組の効果検証に焦点を絞って書かせていただきます。なお、この検証を行うために志摩小学校の児童と保護者からも、今回の取組に参加することについて任意で同意書を提出していただきました。対象は5年生の児童です。期間は令和7年の1学期と2学期の間(4月から12月)です。収集したのは以下の4つのデータになります。

- ・1学期末と2学期末に実施したパフォーマンステスト
- ・1学期始め(5月)と2学期末(12月)に実施した英語に関するアンケート調査(内容は附属小学校で実施したのと同じです)

① 英語力における検証

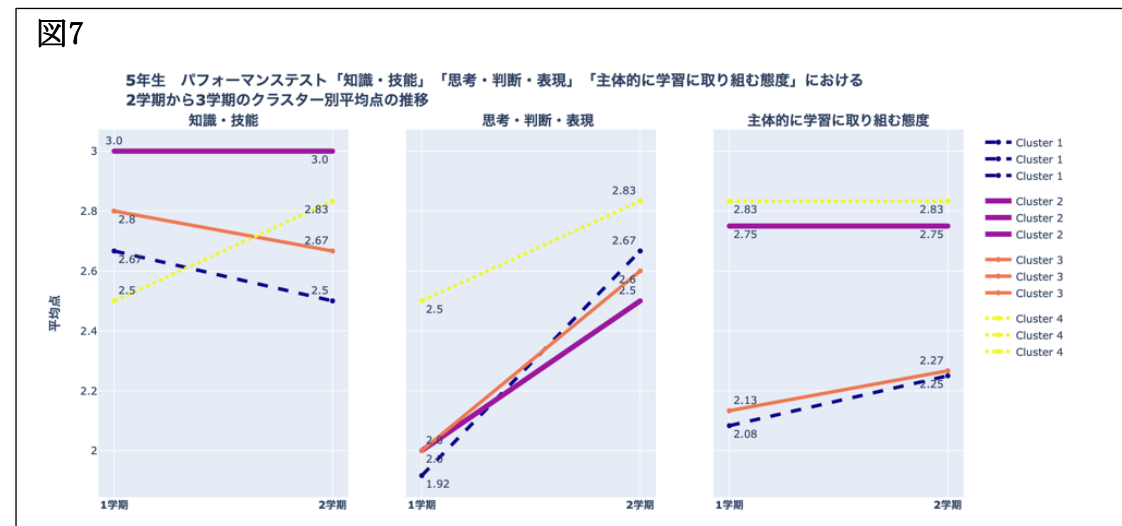
1学期のパフォーマンステストの結果と2学期のパフォーマンステストの結果を比較したところ、知識・技能以外は、全体的に平均点は上がっていました（図6）（もちろん1学期のパフォーマンステストと2学期のパフォーマンステストは問題が違いますから、当然ながら難易度が違うことも考慮に入れておく必要があります）。

図6



もう少し詳しく見ていきましょう。クラスの子どもたちは全員同じというわけではなく、それぞれ個性があります。それをもとに、いくつかのグループに分けることができそうです。ここでもAIを使ってグループわけをしてみました（クラスタリング）。1学期のパフォーマンステストの結果と1学期始めに実施した英語に関するアンケート調査をもとにグループ分けをしたところ、4つのグループになりました。そのグループ毎に図5を描き直してみます（図7）。

図7



面白いことに、知識・技能について、全体では下がっているのに、中には上がっているグループもあります。橙色と紺色のグループが下がっているので、この影響で平均点が下がったんだな、ということがわかります。紫色はもともと満点ですし、黄色のグループは上がっています。主体的に学習に取り組む態度でもこの二つのグループは高得点です。思考・判断・表現は紫色の伸びは控え気味ですが、黄色はそもそも高いです。ちなみに、紫色のグループは「タブレット・デジタル教科書に強い関心を持つ児童のグループ」で、黄色のグループは「デジタル教科書への関心は薄い、タブレットに強い関心を持つ児童のグループ」でした。一方、紺色のグループは「英語が得意だと思わず、学習したいという意欲も控えめな児童のグループ」であり、橙色のグループは「英語があまり得意だとは思わないが、学習したいと思っている児童のグループ」で

した。一概には言えませんが、ここからはタブレット・デジタル教科書に関心を持つ児童のグループは比較的学力が高い傾向がありそうだということがわかります。もちろん、タブレット・デジタル教科書に関心があったから学力が高いのか、あるいは学力が高いからタブレット・デジタル教科書に関心があるのかは、ここからはわかりません。それでも、なんらかの関連はありそうです。

② 情意面における検証

次に情意面を見ていきましょう。「英語学習についてのアンケート」を、録音録画の活動に取り組む前（1学期始め）と録音録画の活動に取り組んだ後（2学期末）で実施しました。単純集計に加えクロス集計も行いました。クロス集計の結果について、各要素の数のばらつきが、偶然の結果ではないことを明らかにするために、統計的仮説検定を行いました。その結果、1学期始めのアンケートでは有意差のある質問項目の組み合わせはありませんでしたが、2学期末に実施したアンケートでは、以下の質問の組み合わせに有意差が確認できました。

- ・「英語をとて勉強したいと思う」生徒は「タブレット（iPad）を使うことに興味はある」傾向があり、「英語を少し勉強したいと思う」生徒は「タブレット（iPad）を使うことにそれほど興味がない」という傾向と、統計的に偶然ではない差があることが示されました。
- ・「英語を勉強したいと思う」生徒は「デジタル教科書に興味がある」傾向があり、「英語をあまり勉強したくない」生徒は「デジタル教科書を使うことに全く興味がない」という傾向と、統計的に偶然ではない差があることが示されました。

要するに、録音・録画の活動を行った結果、英語を勉強したいと思う児童は、タブレットやデジタル教科書を使うことに興味があるようになったということが示されています。発表や話すことにおけるやり取りに ICT を使うと、じゃっかんではありますが、英語力も向上することがわかっています（弱い正の相関）。それゆえ、タブレットやデジタル教科書への関心が高まることにより、発表や話すことにおけるやり取りに ICT を使う機会が増え、その結果、英語力が向上する可能性が生じることが期待できます。事情により、1年目の附属小学校と同じ方法で効果検証はできませんでしたが、それでも普通の公立の小学校でも、情意面において効果が見られることが統計的に確認できたと言えます。

5. 成果

三重県教育委員会が受託した、文部科学省「生徒の英語力向上推進事業」において、**ICT 特にタブレット端末を用いた録音・録画の活動が、児童の英語力と情意面にどのような影響を与えるかを 2 年間にわたり実践、効果を検証しました。**結論として、**学力・情意の両面において効果がある（統計的に有意である）ことが確認されました。**そして、特に、ふだん人前で喋るのが苦手で発表をあまりしない児童に効果的であることや、英語を勉強したいと思っている児童はタブレットやデジタル教科書への関心が強くなったことも明らかになりました。発表や話すことにおけるやり取りに ICT を使うと、じゃっかんではありますが、英語力も向上することがわかっています（弱い正の相関）。それゆえ、タブレットやデジタル教科書への関心が高まることにより、発表や話すことにおけるやり取りに ICT を使う機会が増えますので、その結果、英語力が向上することが期待できます。

6. 今後に向けて

さて、ここからは、この文章を読んでもらっている先生方みなさまへのメッセージになります。今回の2年間の取組とその効果を検証した結果、ICT 特にタブレット端末を用いた録音・録画の活動が、児童の英語力と情意面の両方に効果がある（統計的に有意である）ことが確認されました。活用場面や方法、具体的な事例も、井上先生と樋田先生が示してくださっています。さあ、これからは、先生方みなさまお一人お一人が実際に取り組まれる番ではないでしょうか？ ぜひ、井上先生や樋田先生に続いて、トライなさってみてください。ICT 特にタブレット端末を用いた録音・録画の活動は、効果があることは、今やはっきりわかっていますから！

参考文献

文部科学省 令和6年度 三重県 英語教育改善プラン

https://www.mext.go.jp/content/20240722-mxt_kyoiku01-000037197_24.pdf

文部科学省 令和5年度「英語教育実施状況調査」概要

https://www.mext.go.jp/content/20240527-mxt_kyoiku01-000035833_1.pdf

文部科学省 令和6年度「英語教育実施状況調査」概要

https://www.mext.go.jp/content/20250623-mxt-kyoiku01-000042425_1.pdf

文部科学省 外国語の指導における ICT の活用について

https://www.mext.go.jp/content/20201102-mxt_jogai01-000010146_009.pdf

効果検証に向けた研究実践事例

（１）令和６年度

三重大学教育学部附属小学校 研究実践事例

1 学校名

三重大学教育学部附属小学校

2 名 前

井上 大

3 実 践

- ・児童にとってリアルな発信経験ができるような目的、場面、状況の設定を行い、言語活動の充実を図った。
- ・児童の英語での発信力向上を図るため、外国語科における授業での ICT 活用(録音・録画)を行った。

4 成果と課題

○成果

- ・言語活動の充実を図り、言語活動をとおして指導したことにより、児童が自ら学ぼうとする意欲が高まり、進んで友だちと英語でコミュニケーションを取ろうとする姿が多数見られた。また、外国語科における取組が学習集団づくりにつながっていった。
- ・外国語科の授業における ICT 活用(録音・録画)は、学力面と情意面の双方において効果があった。

○課題

- ・言語活動を行う際の最初や途中、振り返りの時などに、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを共有したり、確認したりしながら、それらに応じたコミュニケーションが実現できているかどうかを見取りながら、より適切な指導を行う。
- ・ICT 活用(録音・録画)の際に、抵抗感のある児童もいるため、目的を丁寧に説明する必要がある。

5 今後に向けて

タブレット端末等の活用については、言語活動を充実させるための手段であり、ICT 活用が目的化しないよう留意したい。まずは、英語の授業づくり、その上で効果的な ICT 活用といった両輪で進めていくことが大切である。

また、発信力を高めるためには、聞く力も大切となるため、ペアを変えて何度もやり取りを繰り返すなど、日ごろからの積み重ねを十分に行っていきたい。

今後も言語活動をとおして指導するといった英語教育の根幹となる授業づくりを大切にして、児童に身に付けてほしい資質・能力を育てていく。

第6学年A組 外国語科学習指導案

令和7年1月31日 金曜日 第5限 於 6年A組教室

指導者 井上 大

I 単元 NEW HORIZON Elementary 6

Unit7 My Best Memory ～5年生に修学旅行の魅力を発信しよう～

II 目標

5年生に小学校生活の思い出や修学旅行の魅力を伝えるために、楽しかったことや行った場所とそこでできることなどについて、短い話を聞いてその概要を捉えたり、自分の考えを含めて話したりすることができる。

III 言語材料

○What's your best memory? My best memory is (school trip).

How was (your school trip)? It was (fantastic).

What did you do? We went to (Arashiyama). We ate [saw, enjoyed, bought,] (pork steak).

It was (delicious).

Sounds good. Nice talking to you.

○したこと、学校行事、町、感想・様子など

IV 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	- How was (your school trip)? It was (fantastic). や What did you do? とその答え方、およびその関連語句などについて、理解している。 - 行った場所やそこでできることなどについて、聞き取る技能を身に付けている。	相手の小学校生活の思い出や修学旅行の魅力をよく知るために、行った場所やそこでできることなどについて、短い話の概要を捉えている。	相手の小学校生活の思い出や修学旅行の魅力をよく知るために、行った場所やそこでできることなどについて、短い話の概要を捉えようとしている。
話すこと(発表)	- How was (your school trip)? It was (fantastic). や What did you do? とその答え方、およびその関連語句などについて、理解している。 - 行った場所やそこでできることなどについて、言語材料を用いて、自分の考えや気持ちなどを話す技能を身に付けている。	自分の小学校生活の思い出や修学旅行の魅力を伝えるために、行った場所やそこでできることなどについて自分の考えや気持ちなどを話している。	自分の小学校生活の思い出や修学旅行の魅力を伝えるために、行った場所やそこでできることなどについて自分の考えや気持ちなどを話そうとしている。

V 指導上の考察

1. 単元について

本単元のテーマは「小学校生活の思い出」としている。卒業まで残り 2 か月となった子どもたちにとって、小学校の思い出は扱いやすいテーマである。特に、今の 6 年生は、4 年前に新型コロナウイルス感染症により、様々な行事が縮小や中止となるのを見てきた。そんな中、6 年生となって実施できた校外学習や運動会、修学旅行、合唱発表会、学年行事などに対して、実施できた喜びや感謝の気持ちを感じることが多かった。また、行事以外でも、卒業証書授与式の日に全員が笑顔で迎えられることを目標とし、その日まで学級全体で成長していくためには、日常生活の何気ない瞬間が大切であると考えた 1 年となった。そのような同じ小学校生活を過ごしてきた子どもたちだが、ピックアップする小学校生活の思い出は人それぞれ違う。なぜ、その場面が思い出になったのかを説明するためには出来事を言うだけではなく、何をしたのか、そこで見たものや楽しかったことは何だったのか、感想などをよりくわしく相手に説明する必要がある。したがって、本単元では、小学校生活でしたこと（過去形）や行事についての語彙や表現について、ペアやグループでのやりとりなどを通して少しずつ学習していく。そうすることで、よりくわしく小学校生活の思い出について伝え合うことができる。単元序盤では、学級内で小学校生活の思い出を紹介し合う中で、様々な行事の魅力を再認識したり、いろいろな仲間の思いを知ったりする。中盤以降では、修学旅行の魅力を伝えるプレゼンテーションを作成する。プレゼンテーションは、5 年生の前ですることを目的とすることで、子どもにとってリアルな発信経験となる。昨年度は自分たちが 6 年生にプレゼンテーションをしてもらったので、そのイメージも残っている。また、修学旅行の魅力を伝えるとともに、次の年の 6 年生にどのような学校にしていってほしいかを伝える。そうすることにより、ただ思い出を振り返るだけではなく、「率先垂範」を学年目標として行動してきた自分たちの生活を振り返り、5 年生に引き継いでいってほしいことを考えるきっかけにもなると考える。それと同時に小学校生活を振り返ることで、自らの成長に気づき、活動を通して仲間と語り合いながら、残り少ない小学校生活でも日々成長しようとする姿を期待する。このような具体的な状況や文脈を豊かに含んだ学びを展開し、言語活動を通してほんものに迫る授業を実現していく。

My Best Memory is ○○.
We went to ○○.
We ate ○○.
It was ○○.

図 1 Unit7 の基本表現

2. 児童について

※掲載を省略しています。

3. 指導について

5 年生に修学旅行の魅力についてプレゼンテーションをすることを本単元のゴールとして設定する。事前に 5 年生に修学旅行についてどのようなことを教えてほしいかのアンケート調査を行った。右がそのアンケートの回答である。

アンケートの結果から、5 年生は 6 年生のアンケートと比べて、修学旅行について聞いてみたい内容が分散していることがわかる。そのことから、

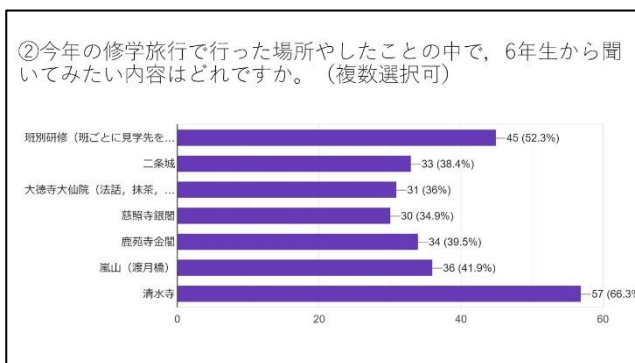


図 2 学校行事についてのアンケート（5 年生）

修学旅行の様々なことに興味を持っていることが

わかる。5年生が6年生のプレゼンテーションの中で知りたいことを記述式で回答した結果、記述の中に「郷土料理」「建造物」「寺」「木刀」「お土産」が出てくる頻度が多かった。そのことから、6年生が「We went / saw / ate / bought ～ .」を使って表現する必要性が出てくる。それ以外にも、「楽しい」「役立つ」「困る」など行った人にしかわからない情報を5年生が求めていることがわかる。プレゼンテーションをするのは6年生だが、聞き手の5年生の立場になって、5年生が聞きたい情報を予想してプレゼンテーションをする必要があることに気づかせたい。

また、単元のはじめに、指導者が小学生の時に体験した「修学旅行の魅力」を実際に話すことによって、子どもが単元末の姿を具体的にイメージできるようにする。その上で本単元の目標を理解し、子ども個々の伝えたい「修学旅行の魅力」が定まっていくと考える。同時に、本単元の目標と毎時の目標を示した単元シートを用意し、いつでも子どもが目に見えるようにする。そうすることで、子ども自身が、修学旅行の魅力を5年生にプレゼンテーションをするという大きい目標に向かって、見通しをもって毎時の授業に臨むことができる。

修学旅行の魅力を5年生に伝える活動では、3つのスパイラル学習で行う。1つ目は、総合的な学習の時間に、修学旅行についてタブレット端末を用いて資料を作り、修学旅行の班別行動を中心にまとめて発表する。修学旅行の班は学級で6班あり、それぞれが違う場所に行ったり、違う昼食を食べたりしている。その様子について、Canvaやロイロノートなどを用いて写真を中心とした資料を作成し、発表する。2つ目は、小学校生活の1番の思い出について、学級の仲間やALTに伝える。ペアやグループでの交流を中心とし、実際の行事の写真を提示しながら発表し合う。繰り返しペアやグループで交流することで、相手の反応を確認しながら、発表内容を再構成する。3つ目は、5年生に修学旅行の魅力についてプレゼンテーションをする。それまでの学習を基に、聞き手を意識しながら、1人ずつ資料を用意し、5年生に対して修学旅行の魅力が伝わるようにプレゼンテーションをする。

単元の前半では、指導者やALTの修学旅行の紹介や教科書の登場人物たちの小学校生活の1番の思い出を聞くことを通して、したことや学校行事、感想・様子などの語彙や“What's your best memory?” “My best memory is (school trip).”などの表現に慣れ親しませる。それと同時に、総合的な学習の時間に自分が行った寺院や博物館などについて再度調べながら、自分が行った場所の感想や行ったからこそわかるその場所の魅力について発表する。その後、小学校生活の1番の思い出について、その行事でしたことや、感想・様子などを少しずつクラスの仲間に伝えながら、小学校生活の1番の思い出をChallenge Time（パフォーマンステスト）で伝えられるようにまとめていく。まとめる際には、動画で授業の記録を残していき、自分でいつでも振り返ることができるようにさせる。Challenge TimeでALTと1対1で小学校生活の1番の思い出を発表したあとで、その時の録画を見ながら、ALTからアドバイスをもらう。そのような活動を取り組んだ上で、単元末の5年生に修学旅行の魅力を伝えるための内容の構成へと焦点を移していく。

VI 単元計画（全 8 時間、総合的な学習の時間を除く）

時	学習活動 ◆目標	評価規準（評価方法）
1	◆修学旅行の紹介の表現を聞き、「修学旅行の魅力」を考える。 ・ 単元シートから単元の流れと最終目標を知る ・ Small Talk ・ Teacher's Talk 「修学旅行について」 ・ Let's Chant ・ Let's Sing ・ 文化体験，世界探検 ・ Activity 「修学旅行の魅力」について考えよう	【本時では，目標に向けて指導は行うが，記録に残す評価はしない。】
2	◆小学校生活の思い出についてのやり取りのおおよその内容を理解する。 ・ Small Talk ・ Let's Read and Write ・ Let's Chant ・ Starting Out ・ Watch and Think ・ Activity 「小学校の 1 番の思い出」を考えよう	【本時では，目標に向けて指導は行うが，記録に残す評価はしない。】
3	◆小学校生活の 1 番の思い出について，したことについて聞いたり言ったりする。 ・ Small Talk ・ Let's Chant ・ Let's Listen1 ・ Activity 小学校生活の 1 番の思い出でしたことについて伝え合おう	知・技（聞） 学校行事やそこでしたことなどについて，聞き取る技能を身に付けている。（行動観察・ワークシート）
4	◆小学校生活の 1 番の思い出について，したことや感想・様子などについて聞いたり言ったりする。 ・ Small Talk ・ Let's Read and Write ・ Let's Chant ・ Let's Listen2 ・ Activity 小学校生活の 1 番の思い出でしたことや感想・様子について伝え合おう	思・判・表（聞） 相手の小学校生活の 1 番の思い出をよく知るために，したことや感想・様子などについて，短い話の概要を捉えている。（行動観察・ワークシート） 態度（聞） 相手の小学校生活の 1 番の思い出をよく知るために，したことや感想・様子などについて，短い話の概要を捉えようとしている。（行動観察・ワークシート）
5	◆小学校生活の 1 番の思い出について，内容をまとめて ALT に紹介する。【Challenge Time】 ・ Small Talk ・ Let's Read and Write ・ Activity① ALT に小学校生活の 1 番の思い出	知・技（話） We ate [saw, enjoyed] ～.などの表現を用いて，小学校生活の 1 番の思い出について話している。（行動観察・録画動画）

	が伝わるようにまとめよう。 ・Activity② ALT に小学校生活の 1 番の思い出を伝えよう	思・判・表（話） 小学校生活の 1 番の思い出について考えたことを相手に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話している。（行動観察・録画動画） 態度（話） 小学校生活の 1 番の思い出について考えたことを相手に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話そうとしている。（行動観察・録画動画）
6	◆修学旅行でしたことや感想、様子などについて聞いたり言ったりする。 ・Small Talk ・Activity1 修学旅行でしたことや感想・様子について伝え合おう ・Activity2 5 年生に修学旅行の魅力が伝わるように、プレゼンテーションの資料を作ろう。	知・技（話） We ate [saw, enjoyed] ～.などの表現を用いて、修学旅行でしたことや様子・感想について話している。（行動観察）
7 (本時)	◆5 年生により修学旅行の魅力が伝わるように発表し合い、内容を再構成する。 ・Small Talk ・Activity 5 年生により修学旅行の魅力が伝わるように、アドバイスをし合おう。	思・判・表（話） 修学旅行の魅力について、考えたことを相手に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話している。（行動観察） 態度（話） 修学旅行の魅力について、考えたことを相手に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話そうとしている。（行動観察）
8	◆5 年生に「修学旅行の魅力」が伝わるように発表する。 ・Small Talk ・Activity 5 年生に「修学旅行の魅力」をプレゼンテーションしよう。	知・技（話） We ate [saw, enjoyed] ～.などの表現を用いて、修学旅行でしたことや様子・感想について話している。（行動観察・録画動画） 思・判・表（話） 修学旅行の魅力について、考えたことを 5 年生に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話している。（行動観察・録画動画） 態度（話） 修学旅行の魅力について、考えたことを 5 年生に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話そうとしている。（行動観察・録画動画）

VII 本時の学習

1. 本時の目標

“We ate (pork steak).” や “It was (delicious).” などの言語材料や既習事項を用いながら、修学旅行の魅力がより相手に伝わるように、語彙や表現を再構成し相手に伝えることができる。

2. 準備物

指導者：PC, TV, 絵カード, 短冊

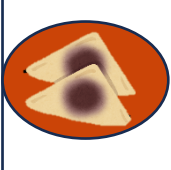
児童：タブレット端末

3. 学習過程（45 分）

学習活動	指導上の留意点 ◎評価（評価方法）
1. Small Talk - Days と Date 及び How are you?などを使い周りの友だちと会話する。 - 中間報告を行う。 - ペアを替えて、話を聞き合う。 2. Daily Activity - タブレット端末を使って小テストをする。 - Let's Chant を行う。 3. Today's Goal ◎ 「5年生により修学旅行の魅力を伝えるために、表現を再構成しよう。」 4. Activity1 修学旅行の魅力を伝え合う - ペアで修学旅行の魅力を伝え合う。 - 中間指導の様子を見て、修学旅行の魅力をより伝えるためにはどうすればいいのかを考える。 5. Activity2 ペアを交代しながら、修学旅行の魅力を伝え合う - ペアや全体で話し合ったことを基にして、再構成のポイントを確認する。 - ペアを変えて、何度もインプットとアウトプットを繰り返す。 - ペアで話し合ったことを基にして、内容を再	1 分間程度会話が続いているか、児童の様子を見ながら机間指導をする。 - 言い方に困った表現がなかったか聞き、既習表現を生かした英語に言い換えさせる。2 回目も reaction を意識させる。 - 先週の宿題の範囲から出題する。音声全体で聞かせた後、問題に取り組ませる。 - 音声入力で月日、曜日などを入力させた後に、Chant の内容も音声入力させる。 - Today's Goal に下線を引き、子どもに読ませる。 - ペアで練習をしたり、紹介する上で困っている部分をアドバイスしあったりする。 - 中間指導によって、必要に応じて語彙や慣用表現に気づくことができるようにする。 - 修学旅行の魅力が5年生にどうすればより伝わるか、相手の立場に立って伝えることができているか確認させる。 - ペアの反応や助言、再構成のポイントを参考に、やりとりに選択して取り入れる。

構成する。 - 再構成した内容を次のペアの人に伝える。 - 再構成した内容をメモしたり撮影したりする。 6. Review - 振り返りを Google Forms に書く。	- 再構成のための良いやり取りをしているペアの例を紹介する。 - 最後に、最初に発表しあったペアに戻り、発表内容をもう一度伝え合わせる。その際に、タブレットで撮影させるなど、活動の始めの発表の様子と比較させる。 ◎ 修学旅行の魅力について、考えたことを相手に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話している。(行動観察) ◎ 修学旅行の魅力について、考えたことを相手に伝えるために、自分の考えや気持ちなどを話そうとしている。(行動観察) - 本時でできたこと、悩んでいること、自分の学習方法を振り返って、次はどんなことを試してみたいかなどを書かせる。
--	--

4. 板書計画

Today's Goal 5年生により修学旅行の魅力を伝えるために、表現を再構成しよう。		☆より修学旅行の魅力が相手に伝わるようにはどうすればいいか。	
		6種類の 味・食感を表す 単語とその絵	【技能面】 - 声の大きさ Clear voice - ジェスチャー Gesture - 文と文の間 - アイコンタクト Eye contact
			【内容面】 - 新しい情報を追加する - 質問を入れる - 相手の知らない部分を入れる →聞き手に興味を持たせる - 難しい表現を言いかえる - 資料を提示する →伝わらないところをなくす - 文の順番を工夫する
	My best memory is our school trip We went to Kyoto. I enjoyed talking with my friends. We ate <i>yatsuhashi</i>. It was delicious.		

効果検証に向けた研究実践事例

（２）令和７年度

志摩市立志摩小学校 研究実践事例

1 学校名

志摩市立志摩小学校

2 名 前

樋田 愛

3 実 践

- ・ペアでの会話やグループで行う発表を ICT 機器で録画をし、自分たちでチェックする活動を年間とおして行った。
- ・コミュニケーションをとる上で大切なことを学期初めに確認し、学年全体で共有した。
- ・活動を繰り返す中で、態度面だけでなく、話している英語の表現もよりよくなっていくことを意識した。

4 成果と課題

○成果

- ・言語活動を繰り返す中で表現を身に付けていく大切さが分かった。
- ・中間指導でよい表現をしている児童を取り上げて紹介することで、他の児童も表現が向上していくことが分かった。
- ・ICT を活用して英語の力をつけることができると分かった。後から確認できること、英語を繰り返し話すことができること、家でも録画の活動ができること、発言が苦手な児童にとっても取り組みやすいことが ICT 機器活用のメリットとして考えられる。児童は作品を仕上げる気持ちで録画の活動に取り組むことができた。
- ・友だち紹介の単元の最終ゴールである台湾の小学生との交流がよい経験になった。引け目を感じず話したり、質問で交流するのを楽しんだりする姿が見られた。英語を話すことに慣れ、積極的に取り組むことができる児童が増えた。自分の言いたいことを英語で相手に伝えたいという気持ちが芽生えたことも成果である。

○課題

- ・一人ひとりがより英語らしい表現に深めていけるようなペア・グループ活動にしていく必要がある。
- ・聞き手を育てること、誰に何を伝えさせるのかを教師がもっと意識しなければならない。
- ・家庭学習で英語に取り組んでいる児童が少ない。

5 今後に向けて

言語活動をするときは、誰に何を伝えるのかを意識させるようにしたい。伝える内容や伝える相手を少しずつ変えながら言語活動を繰り返すことで、自分の言いたいことを相手に伝える力を付けていきたい。中間指導やペア・グループ活動で表現をよりよくしていけるように、教師がさらに研修を深める必要がある。

また、相手の話を受け止めてリアクションを返していけるように聞き手を育てていきたい。

さらに、授業内での学びに加え、録画の活動やデジタル教科書を使ったリスニングや歌など、家庭でも取り組める課題を出していきたい。

第5学年赤組外国語科学習指導案

指導者 教諭 樋田 愛

ALT チョナ

令和7年6月25日（水曜日）第3校時 5赤教室

1 単元名

NEW HORIZON Elementary 5

Check your step1 お互いの魅力、再発見！

2 単元の目標

自分のことをよく知ってもらったり相手のことをよく知ったりするために、相手の名前や誕生日、好きなことやできることなどについて、具体的な情報を聞き取ったり、名前や誕生日、好きなことやできることなどについて伝え合ったりすることができる。

3 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	〈知識〉 名前や誕生日、好きなことやできることなどを伝える表現（My name is / I'm / My birthday is / I like / I can / I want など）や関連語句などについて理解している。 〈技能〉 友だちの自己紹介スピーチを聞いて、具体的な情報を聞き取る技能を身につけている。	相手のことをよく知るために、相手の自己紹介スピーチから具体的な情報を聞き取っている。	相手のことをよく知るために、相手の自己紹介スピーチから具体的な情報を聞き取ろうとしている。
話すこと【やり取り】	〈知識〉 【同上】について理解している。 〈技能〉 自分の名前や誕生日、好きなことやできることなどについて、【同上】を用いて、考えや気持ちなどを伝え合う技能を身につけている。	自分のことをよく知ってもらったり相手のことをよく知ったりするために、名前や誕生日、好きなことやできることなどについて、お互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。	自分のことをよく知ってもらったり相手のことをよく知ったりするために、名前や誕生日、好きなことやできることなどについて、お互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。

【B 評価のやり取り】

A: My name is Ai. I like baseball.

My birthday is January 4th. I can play basketball.

B: What food do you like?

A: I like umeboshi.

4 指導上の考察

(1) 単元について

本単元は、自分のことをよく知ってもらったり相手のことをよく知ったりするために、相手の名前や誕生日、好きなことやできることなどについて、具体的な情報を聞き取ったり、名前や誕生日、好きなことやできることなどについて伝え合ったありすることをめざした1学期のまとめの単元である。1学期に学習した自分のことを伝える表現は、実生活で自分のことを伝える様々な場面に対応して、活用できる内容である。

単元序盤では、自分のことを伝える表現や関連語句を使って、個人で練習をした後に、ペアで友だちのことを知り合う活動を行う。中盤では自己紹介の準備をする。ペアやグループでやりとりをすることで、自分の伝えたいことを整理し、よりよい表現方法について考えることができる。単元終盤には、学習してきた語彙や表現を用いて、4月当初よりもより詳しい自己紹介の発表を行う。発表後には内容に対する質疑応答の時間をもつ。聞き手は発表者の自己紹介の中から、もっと知りたいと思ったことについて質問する。その際には発表をよく聞き、出てきていない情報は何なのかを判断する必要がある。発表者は前もって覚えたことを話すだけでなく、友だちからの質問に答えることでその場でのやりとりを経験することができる。一方通行の発信をするだけではなく、やりとりをすることを通してクラスの友だちのまだ知らなかったことを知り合う活動を行っていく。これらの活動を通して、自分のことをよりよく伝えるための工夫や、話し手と聞き手、それぞれが心がけるとよいことについて、児童一人ひとりが考えを深めることが期待できる。

(2) 児童について

※掲載を省略しています。

(3) 指導について

① ICTの活用について

本単元では、コミュニケーション能力向上を目的としたタブレット端末の録画機能の活用を本格的に導入する。まず児童は第1時で、個人練習として自己紹介スピーチを録画し、その映像を通じて客観的な自己評価と初期の表現改善を行う。中心となる第3時では、質疑応答を含むペア練習全体を録画し、この映像を4人グループ内で共有することで、自分たちの言語運用を客観視できる環境を構築する。この録画データに基づき、児童たちは学期当初に定めた「コミュニケーションで大切にしたいこと」といった項目を参照しながら多角的な相互フィードバックを実施する。この「記録・分析・評価」のサイクルを活用することで、最終的なALTとの発表に向け、児童が発話内容だけでなく、アイコンタクトやリアクションといった非言語的要素の重要性に気づくための強力な支援ツールとなることが期待される。

② 授業の中で大切にしていること

分かる児童だけで授業を進めるのではなく、「分からなさ」から英語を学んでいけるように、「こうやって言いたいけど、何て言ったらいいか分からない」という思いを出すことができる場面を授業の中につくったり、ふりかえりに書かせたりしてきた。多少のまちがいがあっても、何かを伝えたいという気持ちがあれば、十分伝えることができるということを体験させたい。まちがいは恥ずかしいことではなく、まちがいや失敗を繰り返して英語が上達していくことを、言語活動を通して学ばせていく。まちがいを恐れずにペア・グループ活動をしている児童のやりとりをとりあげたり、児童に個別に声かけをしたりすることを通して、教室の中で「分からなさ」や「まちがい」を大切にしている価値観を育てていきたい。

③ 本単元でめざす子どもの姿

本単元ではALTのチョナ先生とクラスの友だちの前で、発表ノートを使って自己紹介を発表することをゴールとする。5年生の1学期の学習の中で、新しい語句や表現を学習し、お互いを知り合う言語活動を重ねてきた。本単元では既習事項を使って自己紹介を発表すること、友だちの自己紹介に対するリアクションや質疑応答をすることを通して、使えるようになった語句や表現について再確認をしたり、お互いのよさを発見したりできることをめざす。

5 指導と評価の計画（全4時間）

時	目標◆活動●	評価規準・評価方法		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	◆名前や好きなもの・こと、誕生日やほしいもの、できることなどを伝える表現や関連語句などについて理解することができる。			
	●名前や好きなもの・こと、誕生日やほしいもの、できることなどを伝える表現や関連語句に慣れ親しむ。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
2	◆自分のことを伝えるために、自分の好きなことやできることなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて考えや気持ちなどを話することができる。			
	●自分のことを伝えるために、自分の好きなことやできることなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて考えや気持ちなどを話す練習を行う。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
3 (本時)	◆相手が話した自己紹介を聞いて、自己紹介に出てきていないことがらについて質問することができる。			
	●友だちの自己紹介を聞いて質問する練習を行い、最終発表に向けた自己紹介と質疑応答の練習を行う。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
4	◆相手の名前や誕生日、好きなことやできることなどについて、具体的な情報を聞き取ったり、名前や誕生日、好きなことやできることなどについて伝え合ったりすることができる。			
	●クラスの友だちやALTの先生と、発表ノートを使って、名前や誕生日、好きなことやできることなどについてやり取りする。	○知・技 (聞くこと/話すこと【やり取り】)(スピーキングテストとしてのやり取り)(動画分析)	○思 (聞くこと/話すこと【やり取り】)(スピーキングテストとしてのやり取り)(動画分析)	態 (聞くこと/話すこと【やり取り】)(スピーキングテストの際の行動観察)(ふりかえりノート、チェックシート分析)

○は記録に残す評価

6 本時の指導

(1) 目標

相手が話した自己紹介を聞いて、自己紹介に出てきていないことについて質問することができる。

(2) ペア・グループ学習のねらい

・互いの考えや気持ちを伝え合う活動を通して、自分の考えを伝える力を伸ばす。

(協働)

・グループで会話を聞き合うことで、お互いのよさや工夫を知り合い、改善に向けて話し合う。
(新たなものを創り上げる)

(3) 準備物

- ・指導者：大型テレビ・パソコン・タブレット端末・チェックシート
- ・児童：タブレット端末・筆記用具

(4) 指導過程 (45 分)

	学習活動・児童の反応	指導上の留意点
導入 10分	1. Greeting あいさつをし、今日の日付、曜日、天気などを言う。 2. Today's Goal (めあての提示)	・毎回繰り返すことで覚えられるようにする。自分たちだけでも言わせる。 ・モデルとなる会話を聞くことで、今日の学習課題をつかませる。
Today's Goal: 友だちの自己紹介を聞いて、もっと知りたいことを質問しよう。		
展開 25分	先生の話す自己紹介【B 評価の対話より】を聞いて、分かったことやもっと知りたいことをペアで考える。 3. Practice 相手の話に対する質問の仕方を復習する。 4. Activity (協働解決) グループになり、今日の会話を練習し、撮影する。 ①最初のペアが対話してい	・児童がつまずきやすいと考えられる自己紹介に対する質問をまずはペアで考えさせる。 ・相手に対する質問の仕方は黒板に提示し、今までストックした表現を思い出しながら会話できるように練習させる。 ・7分間、時間いっぱい行い、チェック項目を見ながらよりよい会話ができるよう声かけをする。 ・7分がすぎたら途中でも交代する。 ・JTE と ALT は机間指導をしてアドバイスをしたり、うまく意思疎通ができないペアの橋渡しをし

	るところをもう片方のペアで撮影する。(7分) ②次のペアが対話しているところを最初に対話をしたペアで撮影する。(7分)	たりする。 ・友だちの自己紹介に質問・応答することが難しい児童がいる場合は、グループの友だちと一緒にどんな質問や応答をすればよいか考えさせるようにする。 【会話をしているペアに指導するときの留意点】 ・会話をしているときは、パートナーの目を見て話すように伝える。 ・聞きやすい声の大きさを心がけるよう伝える。 ・自分たちの会話がチェック項目やアドバイスに沿ってできているか動画を見ながら確認をさせる。 ・他のペアから会話を見てもらうことで、自分たちが気づかなかった視点で、さらに改善に向けて練習を重ねるよう促す。 【撮影しているペアへの指導上の留意点】 ・撮影しているペアは、いいところをほめたり、気づいたことをアドバイスしたりするように伝える。 ・チェックする人をあらかじめ決めておき、その人を中心にアドバイスする。 ・アドバイスをしてもらった人は「次はこうやってやってみるね。」とアドバイスをしてくれた人に伝えるように指導する。 【中間指導】 ・前半の7分が終わったところで、中間指導を入れ、いいやり取りをしていたグループを紹介する。
ま と め 10 分	5. Presentation(一斉検証) 今日活動したことを発表する。 6. Review(ふりかえり) ・ふりかえりメモを書く。	・2～3ペアに練習したことを発表させる。(または録画した動画を見る。) ・英語が得意な児童に指名が偏ることのないように、自信をもたせたいペアや、成長したペア、他のグループに新たな気づきを与えることのできるペアを指名する。 ・挙手がない場合は、指名する。 机間指導のときにこの場面で発表するとよいペアに声かけをしておく。 ・聞いている児童に「発表を見て真似したいと思ったこと」を言わせる。 ・チェックシートには友だちのよかったところを書くところと、自分のふりかえりを書くところがあることを確認する。

(5)板書計画 (大型 TV)

めあて 自己紹介を聞いて、もっと知りたいことを質問しよう。

質問

What do you like? 好きな は何ですか?

What do you want for your birthday? 誕生日にほしいものは何ですか?

When is your birthday? 誕生日はいつですか?

共感が相手に伝わるように
あいづち・リアクション・ジェスチャー

第5学年青組外国語科学習指導案

指導者 教諭 樋田 愛
ALT チョナ

令和7年10月27日（月曜日）第3校時 5青教室

1 単元名

NEW HORIZON Elementary 5

UNIT4 Who is this?

～外国の小学生に自分の友だちを紹介しよう～

2 単元の目標

外国の小学生に友だちのことをよく知ってもらうために、友だちのできることや性格などについて伝えることができる。

3 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
話すこと 【発表】	〈知識〉 He/ She can～、He/ She is ～など、身近な人のできることや性格などを伝える表現や関連語句などについて理解している。 〈技能〉 身近な人のできることや性格などを伝える表現や関連語句を用いて、考えや気持ちなどを話す技能を身に付けている。	外国の小学生に友だちのことをよく知ってもらうために、友だちのできることや性格などについて伝えている。	外国の小学生に友だちのことをよく知ってもらうために、友だちのできることや性格などについて伝えようとしている。

【B 評価の発表】

She(He) is Shinobu.

She(He) is my friend.

She(He) is active.

She(He) can play softball.

【A 評価の発表】

- ・ B 評価の発表に加えて、友だちの性格やできることを複数の文で話すことができる。
- ・ I can play softball, too. Can you play softball? / But I can't play softball. など、自分のことと関連させて話すことができる。

4 指導上の考察

(1) 単元について

本単元は、お互いのことをよく知るために、身近な人のできることや性格などについて、内容を整理した上で、簡単な語句や表現を用いて話すことをめざした単元である。他者を紹介し合うことで、お互いの知らなかったことを知るよい機会となる教材である。また将来児童たちが国際社会で生きていく上で、英語で他者を紹介したりされたりする機会が多くあるであろうことも想定して指導をしたい。

単元序盤では、身近な人について伝える表現や関連語句を使って、ペアで友だちのことをたずね合う活動を行う。中盤では自分の好きな有名人や家族を紹介する活動を通して、第三者を紹介する経験を積ませる。単元終盤には、学習してきた語彙や表現を用いて、外国の小学生に「自己紹介」と「友だち紹介」をすることをゴールとする。友だちのできることや性格について発表し、外国の児童に友だちのよいところを知ってもらうようにする。外国の児童と交流するのは、今まで日本人同士でコミュニケーションをした経験しかない児童たちにとって、初めての大きな挑戦になると考えられる。この経験を通して、「自分の英語が相手に伝わって嬉しい」という思いを持たせ、成功体験を積ませたい。これらの活動を通して、自分の伝えたいことをよりよく伝えるための工夫や、話し手と聞き手、それぞれが心がけるとよいことについて、児童一人ひとりが考えを深めることが期待できる。

(2) 児童について

※掲載を省略しています。

(3) 指導について

友だち紹介の発表を個人練習する際には、タブレットを使って自分の発表を録画して、後からチェックをすることで、よりよい表現方法について考えることができる。

① ICTの活用について

1学期からタブレットで会話やスピーチを録画することを続けてきた。児童たちは英語を話している自分を客観的に見て、話し方を工夫することができるようになってきた。「クラスの友だちの前で英語を話すのは少し緊張する」という児童もいるが、録画をするときに英語を話すことが、実際に友だちとコミュニケーションをとる前のステップとして役に立っている。教師が後から動画をチェックして、一人ひとりに合ったアドバイスができることも、児童たちの英語力の向上につながっていると考えられる。1学期は話し方や態度など、コミュニケーションの基本を身に付けることに多く時間をとってしまったが、2学期からはICTの活用で教科としての深い学びを促すという視点に立ち返り、会話や発表の内容を豊かにしていくこともめざしていきたい。

② 授業の中で大切にしていること

何かができる、できないという価値観だけでなく、頑張っ て取り組む姿勢や、友だちと助け合っ て活動できることに重きを置きたいと考えている。また、前の自分より成長していることに気づかせ、自信を持たせるようにしたい。そのため児童たちの振り返りから、自分のよかったところや、友だちのよかったところを、クラスの中で取り上げて交流することを続けてきた。そのときにはうまくできなくてもあきらめずに取り組む姿勢や、友だちと助け合おうとする姿を取り上げるようにしてきた。自分が成長したことを書いている振り返りをクラスで聞き合うことで、自己評価が厳しく自信が持てない児童たちにも「自分の英語は完璧ではないけど、成長しているのかもしれない」と思わせたい。友だちのいいところを振り返る場面では「〇〇さんが友だちを助けていた」「〇〇さんが間違えてもあ

きらめずに話そうとしていた」という視点で活動を振り返ることができる児童が増えてきた。「分からなさ」や「まちがい」からスタートし、結果だけでなく、頑張っ取り組む過程を大切に価値観を育てていきたい。そして友だちと助け合う活動の中で、分からないことは「分からない」と言える力、友だちの「分からなさ」に寄り添う姿勢、友だちを助け、アドバイスをすることで力をつけるようにしていきたい。

③ 本単元でめざす児童の姿

本単元では外国の小学生に、自分や友だちのことを知ってもらうことをゴールとする。5年生の1学期には、新しい語句や表現を学習し、自分のことについて伝え合い、お互いを知り合う言語活動を重ねてきた。本単元では既習事項と新出事項を使って「友だち紹介」を発表することを通して、使えるようになった語句や表現、リアクションについて再確認をし、お互いのよさを発見できることをめざす。また自身の表現の幅が広がったことに気づかせ、自信を持たせたい。

本単元では言語活動を繰り返す中で、児童たちが自分に必要な語彙や表現を身に付けていくように指導していきたい。また友だちの発表を聞いて、自分の発表に足りないもの考える活動を通して、発表の中の表現を豊かなものにしていきたい。友だちのできることや性格をできるだけたくさん話したり、自分と友だちを比較して話したりできる児童を増やしていくことをめざしたい。

5 指導と評価の計画（全9時間）

時	目標◆活動●	評価規準・評価方法		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	◆身近な人についてのやり取りから、具体的な情報を聞き取ることができる。			
	●デジタル教科書を使って He can/She can He is/She is など、身近な人を紹介する表現に慣れ親しむ。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
2	◆身近な人のできることを紹介することができる。			
	●He can/She can を使って身近な人のできることをペアで話す。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
3	◆身近な人の性格を紹介することができる。			
	●He is/She is を使って身近な人の性格をペアで伝え合う。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
4・5	◆自分の好きな有名人のできることや性格を紹介することができる。			
	●He can/She can、He is / She is を使って自分の好きな有名人について伝え合う。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		

6	◆ 自分の家族のできることや性格を紹介することができる。			
	● He can/She can、He is / She is を使って自分の家族について伝え合う。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
7 (本時)	◆ 初めて会う外国の小学生に、友だちのことをよく知ってもらうために、「友だち紹介」の内容を考えることができる。			
	He can/She can、He is / She is を使って「友だち紹介」を伝え合い、内容を再構成する。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		
8	◆ 外国の小学生に友だちのことをよく知ってもらうために、友だちのできることや性格などについて伝えることができる。			
	外国の小学生に友だちのいいところが伝わるように発表する。	○知・技（スピーキングテストとしての発表） (動画分析)	○思（スピーキングテストとしての発表） (動画分析)	○態 (行動観察) (動画分析)
9	◆ 日本と世界の文化に対する理解を深めることができる。			
	映像や音声を手がかりにして、世界の文化について考える。英語で人を指す言葉（人称代名詞）などを知る。	本時では、記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。		

○は記録に残す評価

6 本時の指導

(1) 目標

初めて会う外国の小学生に、友だちのことをよく知ってもらうために、「友だち紹介」の内容を考えることができる。

(2) ペア・グループ学習のねらい

- ・互いの考えや気持ちを伝え合う活動を通して、自分の考えを伝える力を伸ばす。
(協働)
- ・グループで会話を聞き合うことで、お互いのよさや工夫を知り合い、改善に向けて話し合う。
(新たなものを創り上げる)

(3) 準備物

- ・指導者：大型テレビ・パソコン・タブレット端末・チェックシート
- ・児童：タブレット端末・筆記用具・ヘッドセット・変換ケーブル

(4) 指導過程 (45 分)

	学習活動・児童の反応	指導上の留意点
導入 5分	1. Song 2. Today's Goal (めあての提示)	・タブレットの音声入力機能を使って、児童の歌っている歌の歌詞が画面上に出てくるようにする。英語の歌が歌えていること、正しく発音できていることに自信を持たせるようにする。
展開 25分	Today's Goal 初めて会う外国の小学生に、友だちのことをよく知ってもらえるように、「友だち紹介」の内容を考えよう。	
	教師の話す「友だち紹介」【B 評価の発表】を聞く。 3. My time① 「友だち紹介」の発表を個人で録画する。 4. Activity I ・紹介する友だちとペアになり、他のペアに「友だち紹介」を伝える。(4人組) ・相手を変えてインプットとアウトプットをくりかえす。	・モデルとなる友だち紹介を聞くことで、今日の学習課題をつかませ、「自分の考えた『友だち紹介』の内容をより良いものにしたい」という気持ちを持たせたい。 ・あえて簡潔なモデル文を示すようにする。足りないところは ALT に質問してもらうようにし、文章を足していくようにする。 ・5分間の練習時間の間に発表を録画させる。チェックシートに書き込んである自分の目標が達成できるように、動画をチェックしながら繰り返し練習を行わせる。 ・友だちの表現をよく聞いて、取り入れたいことを見つけるよう声かけをする。具体的には友だちの紹介をたくさん考えて話そうとしていたり、自分と比較して話していたりする表現に気づいてほしい。しかしここでは具体的には言わず、児童たちが活動の中で見つけていけるようにする。 ・発表者の英語が出てこないときは、ペアでどんな英語を言えばいいか考えさせたい。そうすることで教える側も教えてもらう側も勉強になることを伝えたい。 ・2回終わったところで中間指導を入れる。友だちの紹介をたくさん考えて話そうとしている児童、自分のことと比較して伝えている児童がいれば紹介し、他の児童の紹介文の内容を深めていくようにする。 ・モデルになる児童が出てきた場合、児童の発表と関

	5. My time② 「友だち紹介」をよりよいものにするため、発表を個人で録画する。 6. Activity2 ・紹介する友だちとペアになり、他のペアに「友だち紹介」を伝える。(4人組) 7. My time③ 本時のまとめとして個人で発表を録画する。	連付けて、よりよい友だち紹介にするポイントを黒板に貼っていく。 ・モデルになる児童が出てこなければ教師とALTのやりとりを聞かせて、どんな表現をプラスするとよいかを気づかせたい。 ・5分間の練習時間の間に発表を録画させる。他のペアの表現で取り入れたいことがあれば取り入れて、自分の「友だち紹介」を再構成していくよう指導する。 ・再構成した友だち紹介を伝えさせる。 ・表現を増やすことが難しい児童には他児童からアドバイスをさせるようにする。 ・1回目、2回目より表現を増やすことを意識させる。
まとめ 10分	8. Presentation 今日やったことを発表する。 9. Review(振り返り) ・チェックシートに振り返りを書く。	・2～3人に練習したことを発表させる。 ・英語が得意な児童に指名が偏ることのないように、自信をもたせたい児童や、成長した児童、他の児童に新たな気づきを与えることのできる児童を指名する。 ・挙手がない場合は、指名する。 ・机間指導のときにこの場面で発表するとよい児童に声かけをしておく。 ・聞いている児童に「もっと聞いてみたいこと」を質問させる。 ・チェックシートにはペアで練習した相手の発表のよかったこと、真似して取り入れた表現を書かせるようにする。机間指導をしているときに振り返りに書いていることを確認しておき、表現を増やすことのできた児童の振り返りを全体でも取り上げるようにしたい。 ・うまくできなくてもあきらめずに取り組もうとしていたことや、友だちと助け合おうとしたことについて書いてあるものも取り上げるようにする。机間指導をしているときに振り返りに書いていることを確認しておく。

(5) 板書計画

めあて 初めて会う外国の小学生に、
友だちのことをよく知ってもらえるように、「友だち紹介」の内容を考えよう。

○よりよい「友だち紹介」にするには…

- ・友だちのできるだけでなく、自分のことも関連させて伝える。

He/She can play … But I can't play …

He/She can play … I can play …, too. Can you play…?

- ・友だちの性格やできることを紹介する文を増やす。

